銅山の発見についてはもう一説がある。大坂の小間物商円八郎にまつわる伝説がそれである。円八郎は行商先で、伊勢詣りの女と知り合って夫婦となり、仲むつまじく暮らした。奥州生まれの妻は、寛永十四年（一六三七）の五月、夫に「わたしの在所は奥州米白（よねしろ）港から一八里（約七二キロ）ほど上流の極印沢というところです。あちらに来る機会があったらぜひお立ち寄りください」と言葉を残して去った。

円八郎はその秋、妻から聞かされた道筋をたどり、米内沢で極印沢について尋ねたがわからず、さらに川を四里（一六キロ）ほどさかのぼり、大沢、小沢から来る御用材に極印を打っている場所で木樵（きこり）小屋を見つけ一夜の宿を願った。その夜、円八郎は夢枕に立った老女から「私は先年あなたと夫婦（めおと）であったものです。いろいろお世話になったお礼に宝物をあげたい。ここから西にある暗闇の沢ですが、そこに貴石がある」と伝えられた。円八郎は翌朝その沢の入口に金光に光る石を発見し、その石を大坂に持ち帰って熊野の金掘りに調べてもらったところ、すばらしい鉱石であることがわかった。円八郎は金主を見つけ、ふたたび極印沢へ来て、採掘を始めたという。